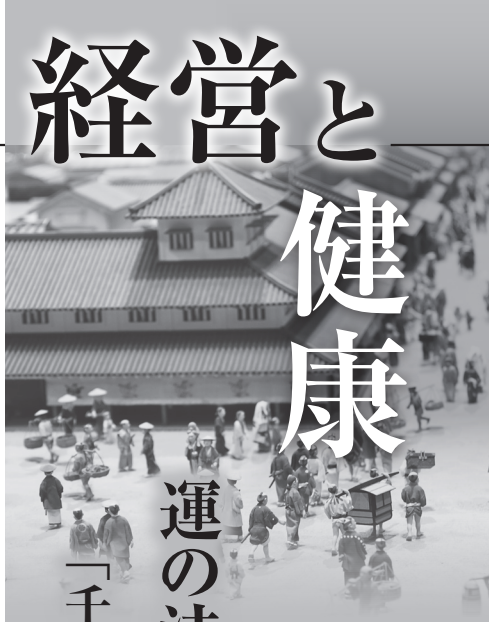

# 運の法則　番外編

## 「千両の当り札を焼いて、運を掴んだ侍」

講談師　一龍斎貞花

折角の千両の当り札を焼いて運を捨てたことが後に大きな運を掴んだ貧乏侍。実在の人物ですが話しは講談です。

文政5年師走の25日、店の金1両2分をすられた小僧、主人が厳しく店へは帰れぬと話を聞いた侍。天下の直参というと偉そうだが4両2人扶持の貧乏御家人井上半次郎。内職の提灯を張って親子4人長屋住まい。蔵前の札差しで半年分の切米代受け取ったのが2両、小僧が可哀想になり1両2分与え残りが2分、家には妻のお松、7歳の新太郎、5歳の千代が帰りを待っている。

「たった2分では、払いも足りぬ、子供の着物どころか餅もつけん」

ぼんやり歩いていると、大勢の人がぞろぞろ坂を登っていく。ついていくと湯島の天神、丁度富くじ興行の日、皆につられて1枚1分の富くじを、買ったあとで、

「貧すれば鈍するというが、情ない気になったものだ」

我が家へ帰り夕餉の箸を取った時、

「湯島天神の当り富、1番千両の当りから10番まで明細にわかって1枚が5文、おはなし、おはなし」

これを聞くや表へ飛び出し、1枚求め行灯の前へ、富札を取り出すと、

「やっ、当ったぞ、1番千両当った。一口は千両分限と申す、もうお前には提灯張りはさせぬ、嬉しいだろう」

「いいえ、私は少しも嬉しくございません。たとえ4両2人扶持でもまさかの場合には将軍様のご馬前にて討ち死なさる譜代のご直参、たとえ塩をなめて暮しても恥ずかしいことはございません。まぐれ当りの千両金、お刀の手前当り札をどうぞお捨てになって下さい」

きつい妻女の意見。小僧を助けたことから1千両当りの大幸運、私ども夫婦なら大喜びするところですが、

「あなたも私も心にゆるみが出ます。親を見習う子がしっかりするはずがなく行末が案じられます」

真心こめた妻の言葉に、人並みすぐれた人物ですから、

「わしが悪かった。一時の迷いだ許してくれ」というや、行灯の火に当り札を、たちまち燃えて灰となりました。千両の当り札を焼いたのが、夫婦の気を引きしめ夜の目も寝ずに内職に精を出したお陰で、餅もつけば子供たちに新しい着物を着せてやることが出来、一陽来福の春を迎えました。

すると組頭大久保左門からお呼び出し、「夫婦のやり取りを窓下で聞いたご用聞きの三次が感心して、町奉行筒井伊賀守へ、伊賀守も感心して寺社奉行へ、老中方のお耳にまで達し、無役でおくのは惜しいと、お小人目付申し付けるとのご内意、ご内儀も偉いがその意見を入れて千両の当り札を灰にしたそなたも偉い」

井上家は初春早々春が重ねてきたような喜びでございました。

無役の小普請組からお小人目付に抜擢された半次郎、これが出世の端緒(いとぐち)で、間もなく筒井伊賀守に望まれて町方同心、更に吟味与力にまで昇進し2百石を頂く立派な身分となりました。

天保の改革を行った老中水野忠邦に引き立てられ勘定奉行にまで出世して井上豊前守。忠邦が富くじを廃止しましたが、その先頭に立って推し進めたのがこの井上半次郎。当りくじを焼いたことが余程心に引っかかっていたんですか、いえいえ誠実な人柄として奉行を勤め、そこからこの講談が作られたのではないかと思います。

## 命まで助かった運

天保9年10月半ば、半次郎所用があって御厩河岸から本所へ渡ろうと、渡し場へ来ると丁度向河岸から船が着いた処で大勢の乗合い客がぞろぞろ上ってくる。それを待って船に乗ったが乗合いが少ないのですぐには船を出しません。すると今船から上がった乗合い客の中に小僧を供に連れた30前後の相当な商家の主らしい町人、しきりに半次郎の姿を眺めていましたが船へとって返し、

「誠に失礼でございますが、今から17年前の文政5年暮れの25日、浅草蔵前で丁稚小僧に1両2分のお金をお恵みになりましたのは、貴方様ではございませんか」

「そういえばそういうこともあったのう、して其許は」

「矢張り貴方様でございましたか、お金を恵んで頂きました小僧は私でございます。恩人の貴方様にお目に掛りたいと、その願いが叶ってお目に掛ることが出来ましたのも神様のお引合せと存じます。只今ではこの駒形で店を持ち、紙問屋を致しております。どうかお立ちより下さいますよう」

「全く奇遇だの。その後の話しも聞き、また某の話しも致そう」

駒形の表通りで5間間口の立派な店構え、のれんに近江屋とあり手代、小僧が5、6人。主人は半次郎を奥へ案内し、茶が出る、酒が出る。

ところへ最前供をしていた小僧が、あわただしく座敷へきて、

「旦那様、私共が乗って参った船が風が強くてひっくり返り、乗っていた人が皆んな死んだそうでございます」

「私達が乗ってきた船か、アッそれではさっき貴方様がお乗りになった船でございましょう」

武江年表天保9年のところに、10月16日浅草御厩河岸渡し船1艘くっ返り人多く死すとあるのがこの事故。

「其許に会わぬと、わしは死ぬところであった」ここでも命が助かるという運が。

「私は深川の漁師の倅で幸太郎と申し、父は私を商人にしたいと10歳の時紙問屋に奉公させました。主人は吝(しわ)い人で年季近く迄奉公人をこき使った揚句、年季を勤め上げますと、手当の金をやるのが惜しくて難癖をつけて追い出してしまい、私は年季を勤め上げお礼奉公を3年致しましたところから、主人が亡くなる前、俺がどうしても追い出すことが出来なかったのはお前だけ、よく勤めてくれたと、のれんを分け店の品を半分つけてやると仰有って下さいました。それからここへ店を持って3年一生懸命働きましたお陰で今ではこの店を持つことが出来ました。よくなればなるほど貴方様のことが思い出され、主人の金をすり盗られとても許してくれる主人でなく、身を投げて死のうとした時貴方様にお助け頂いたお陰でございます」

「ご両親はお達者かな」

「一昨年父が亡くなり、昨年母が亡くなりました」

「それはご愁傷のことじゃが、してご家内は」

「勧める人も沢山ございましたが、両親を見送る迄は娶らぬことにしておりましたので、まだ女房はおりません」

「さても今の世に珍しきご孝心」

半次郎、幸太郎の心掛けに感心。

今では吟味与力となり、2百石を頂く身分になったことを話し、幸太郎を喜ばせました。半次郎の娘千代が未だ良縁なく嫁がずにおりましたので幸太郎妻にと申し受け両家とも末永く栄えました。

当りくじを焼き捨て折角の運を手放すなどできることではありません。

出世ばかりか命まで助かるという大きな運、それもこれも情けは人のためならず、目先の運を焼き捨て、もっと大きな運を掴んだという題して「春重出世の富札・井上半次郎」の一席。